

聖書：第一列王記2章13～25節

説教：王位はだれのものか

あらすじ

若いときから一生懸命イスラエルのために働いて生きてダビデも高齢となってきました。普通なら後継者を指名して王の座を譲るべきところですが、なぜかそうしません。これを見て行動を起こしたのが息子のアドニヤです。ある日、父に相談もせずに仲間を集めて「今日から自分がイスラエルの王である」と勝手に宣言してしまいます。いわゆるクーデターです。一瞬の政治的な空白を狙った計画的な犯行と言っていいでしょう。

事件をキャッチした預言者ナタンは、バテ・シェバとともにダビデのところに走り、今すぐにソロモンを後継者に指名するよう説得します。ダビデはこの重大さに気がつき、ソロモンを次のイスラエル王に指名します。これを受けて、その日のうちにソロモンの王位就任式が執り行われ、ダビデの跡を継いで三代目のイスラエル王に就任します。

前回は、ダビデが臨終の間際に息子ソロモンに対して、遺言を残した所を見てきました。「誠実をもって神の前を歩むなら、あなたには、イスラエルの王座から人が漸たれない。」そのように語ったダビデは、自分ができなかった様々なことをソロモンに託した後、地上の生涯を閉じて眠りにつきました。

今日の箇所には、アドニヤとバテ・シェバが登場します。わからないのはバテ・シェバの行動です。いったい何を考えていたのか。彼女の信仰に目を留めていきたいと思えます。

1 アドニヤ

1) ダビデに刃向かうが一度赦される(1章53節)

アドニヤはクーデターを起こし王に背いたのですから普通なら重い処罰を受ける所です。ところが彼はいま何事もなかったかのように自由に振る舞っています。なぜそうできたのか。

話は、ソロモンが王位に就任した日に戻ります。アドニヤが大ぜいの要人を招き、自分の王位就任パーティーを開いていた最中のことです。

使いが来て、ダビデがソロモンを王に指名したとの知らせが入りました。アドニヤの計画は破綻しました。彼は、この宴会が終わったらソロモンとその母バテ・シェバをなぎものにしようと考えていました。でも今度は自分が殺される番です。すぐに逃走するのですが、結局逮捕され裁判が行われます。そのときソロモンはこう言うのです。「彼がりっぱな人物であれば、彼の髪の毛一本でも地に落ちることはない。しかし、彼のうちに悪があれば、彼は死ななければならない。」そして判決が出ます。今で言えば、執行猶予になりました。軟禁状態にはならなかった。自由に移動できます。それでバテ・シェバのところにやって来ました。

2) アビシャグを妻として与えて欲しい

アドニヤはバテ・シェバにこう言います。17節。「どうかソロモン王に頼んでください。あなたからなら断らないでしょうから。シュ

ネム人の女アビシャグを私に与えて私の妻にしてください。」

アビシャグとはいったい誰なのか。実は、以前一度出て来ております。ダビデが老人になったとき、夏でも寒い寒いと訴えるので、家来たちは、イスラエルの中で美人コンテストをして勝ち残った者を連れて来てダビデのそばめという立場で世話をさせた。それがアビシャグだったのです。ということは、アドニヤは何を求めたことになるのか。父の妻を、自分の妻にしたいと言ったことになります。なぜそんなことを言うのでしょうか。

3) 王位は私のものであるはず

その理由についてアドニヤ自身が自分の口で語っています。前後しますが15節です。「ご存じのように、王位は私のものであるはずですし、すべてのイスラエルは私が王となるのを期待していました。それなのに、王位は転じて、私の弟のものとなりました。主によって彼のものとなったからです。」

クーデターが失敗に終わった事が相当悔しかったようです。まだ、自分が王となる望みを捨てません。それで彼は考えた。父の妻であるアビシャグと結婚しよう。どうしてそんなことを考えたのか。

ダビデの時代、それまで支配していた王を戦争や何かで倒したなら、王のそばめを自分のものとするという習慣があったのだそうです。実は、ダビデの次男であるアブシャロムも、以前クーデターを起こしたとき、自分が王となったことを人々に示すために、父ダビデのそばめのところに入ったと聖書に書かれています。

つまりアドニヤは何を願ったことになるのか。気に入ったから結婚したいという単純

なことではない。自分はイスラエルの王となるという野望は捨てていない。ソロモンに挑戦状をたたきつけたことになります。

4) バテ・シェバの願いならば断らないはず

こんなお願い、普通なら断るはずでしょう。ところがバテ・シェバは断らない。丁寧にソロモンのところに行き、20節で「あなたに一つの小さなお願いがあります。断らないでください」と切り出しています。ある研究者は、彼女はなんの害もない小さな願いだと思っていたのだらうと説明しています。でも私はそうは思いません。政治の世界がそんな甘い物ではないことをバテ・シェバだって知っていたはずです。アドニヤの魂胆を知っていながら、ソロモンに仲介したと考えた方がまだ自然です。でも危険な話をわざわざ進めようとするのはなぜか。わからないことが沢山あります。このことは最後に触れます。

2 ソロモン

1) 主が自分を王座に着かせてくださった。その主は生きておられる

ソロモンから最上級の敬意をもって迎えられたバテ・シェバは、こう言います。「シュネム人の女アビシャグをあなたの兄アドニヤに妻として与えてやってください。」

これに対するソロモンの反応は非常に厳しいものでした。22節。「なぜ、あなたはアドニヤのためにシュネム人の女アビシャグを求めるのですか。」そう言ってから、アドニヤがこれをきっかけにして王の座を狙おうとしていることを指摘し、こう言うのです。24節。「私の父ダビデの王座に着かせて、私を堅く立て、お約束どおりに、王朝を建ててくださった主は生きておられる。アドニヤは、

きょう、殺されなければなりません。」

2) 彼のうちに悪があれば、死ななければならぬ

ソロモンは冷酷な政治家として、この機会に自分に刃向かおうとする者をあらゆる理由を見つけて徹底的につぶそうとしているのでしょうか。そうではない。もういちどアドニヤの立場を思いだしてください。彼はクーデターを起こしても、その罪は赦され、執行猶予の状態にあったのです。本当はあるとき殺されていたはずなのに、自由となった。ところが、アドニヤは野心を捨てない。赦されて助かったことに感謝するどころか、自分を赦したソロモンを憎み、ソロモンを王座から引きずり下ろすために、ソロモンの母親バテ・シェバに仲介の依頼さえしていく。「彼のうちに悪があれば、彼は死ななければならぬ。」ソロモンはアドニヤにきちんと念を押していました。それなのに、アドニヤは悪をあからさまにしていくのです。ソロモンが格別に厳しいのではない。全部自分で蒔いた種です。むしろソロモンが、アドニヤに救いの道を備えていたことのほうが驚きです。

3 バテ・シェバ

1) 信仰

ここまでバテ・シェバのことは、いったんわきに置いたままでした。アドニヤは、バテ・シェバとソロモンを殺そうとした相手です。その当の本人が直接面会に来たのですから、緊張したはず。「平和なことですか」と探りを入れて用心し、アドニヤが語るひとことひとことを吟味します。すぐにこれは大変なことだと気づきました。息子のことを思うなら、こんな危険な話を持って

行く母親はいないでしょう。ところが、バテ・シェバは危険を承知で持って行く。「一つの小さなお願いがあります。断らないでください」とまで言う。本気で言ったと思いますか。本気ではない。心の中では断って欲しいと願っています。ではなぜ本心を言わないのか。ここがポイントです。

皆さんがバテ・シェバであったなら、こんな場合どうするでしょう。自分のところでこの話題を押しとどめておく。わざわざソロモンの所に持って行く必要はありません。アドニヤのいる前で断ってもよかったです。あるいは、ソロモンにもっていったとしても、「この話は断りなさい」と言うこともできたはずではないか。けれどもそれすらもしない。それどころか、何も気がつかなかった愚かな母親の振りまでします。

なぜこんなことをするのでしょうか。もし自分の判断でアドニヤの話を断ったなら、あるいはソロモンに断りなさいとアドバイスすれば、何をすることになるか。自分の判断、自分の計画がそこに入り込みます。いやもつと言え、息子を守りたい、王の座を失いたくない、自分の野望になってしまうのです。それをしたなら、結局アドニヤがしていることと何も変わりません。

バテ・シェバは神から問われています。ソロモンをダビデの王座に着かせてくださったのは主である。それをあなたは信じていることができるか。いま、アドニヤからの挑戦状を前にして信仰が問われています。アドニヤが脅すようにして王位を要求してきても、主のご計画が揺るがないということを信じられるか。バテ・シェバは、自分の思いを捨てて、アドニヤの依頼をそのまま王に伝えます。

ソロモンはどう応えたか。23 節「ソロモ

ン王は主にかけて誓って言った。『アドニヤがこういうことを言って自分のいのちを失わなかったら、神がこの私を幾重にも罰せられるように。私の父ダビデの王座に着かせ、私を堅く立て、お約束どおりに、王朝を建ててくださった主は生きておられる。アドニヤは、きょう、殺されなければなりません。』

20 節でソロモンは母の願いは断らないと約束していました。しかし、結果的にその母との約束を破ることになりました。決して母親をないがしろにしたものではありません。それよりもっと重大なことがあったからです。イスラエルの王位は誰が定めたのか。王位はだれのものなのか。アドニヤは兄である自分が王位に着くべきであるとして、神のご計画を知りながら、それを軽蔑します。しかしソロモンは違いました。王位を定めたのは主である。自分のものではない。母との約束を破ってでも、主のご計画に背く者は、たとえ兄であっても、いのちを絶たなければならぬ。そのような決断を下します。

バテ・シェバは主の約束を信じるかどうか、ぎりぎりの所を通されていきました。自分の思いをいっさい捨てていったとき、ソロモンの口を通して主のご計画がだけが正しく、そしてすみやかになされていくことをはっきりと見ることになりました。

2) 主のご計画だけがなされていく

バテ・シェバをとおして、主のお姿が浮かび上がってきます。この方は、正しいことを語ったためにパリサイ人、律法学者たちから怒りと憎しみを買い、彼らはイエスを殺そうとします。そうやって十字架に追われていき、十字架でいのちを捨てます。ご自分が墓の穴からよみがえるのかどうか。それは全部、信

仰によって父なる神に委ねなければなりません。主は信仰によって、父なる神の手によってよみがえりました。たとえいのちを捨てたとしても、たとえ敵に殺されるようなことになったとしても、終わりではないのです。信じる信仰さえあるなら、あなたは必ず神の救いに入れられていくと言ってくださいます。

私には小さな信仰しかありません、と言うのでしょうか。からし種のような信仰であつても、主がそれを育てて大きくしてくださると言ってくださいます。私たちがりっぱな信仰者になるのではない。主がしてくださる。そのことも主に委ねたいと願います。